

# 「運命論者」論

## ― 独歩の△運命観▽の形成を通して ―

岩 崎 文 人

「運命論者」は、明治三十六年三月『山比古』に発表され、後に独歩の第三創作集『運命』の巻頭に収録されたものである。こうしたことがらは、独歩にとって「運命論者」がきわめて愛着の深いものであったことを示しているが、同時に、創作集の表題が「運命論者」ではなく「運命」であったことは、作家独歩の精神のありどころを示唆するものとして興味深い。

また、独歩の創作集のうち生前刊行されたものに、『武蔵野』（明34・3）、『独歩集』（明38・7）、『運命』（明39・3）、『濤声』（明40・5）の四文集があるが、全体を象徴する暗示的表題を持つのは、『運命』だけである。

事実、『運命』に収録された作品の中で、直接△運命▽に触れたものに、『運命論者』の他、『酒中日記』（明35・11）、「非凡なる凡人」（明36・3）、「馬上の友」（明36・5）、「悪魔」（明36・5）等があり、直接触れられないまでも、独歩の△運命観▽を知る上で重要なものに、『画の悲み』（明35・7）、「空知川の岸辺」（明35・12）、「日の出」（明36・1）等がある。

さらに、この集に収録された作品以外にも、△運命▽が作品成立の主要な契機となったものに『河霧』（明31・8）、「帰去来」（明34・5）、「女難」（明36・12）等がある。

このように、独歩文学の理解のために、△運命▽が概要であることは、おそろくまちがいない。

ここでは、まず、「運命論者」をとりあげ、独歩における△運命▽という問題について検討を加えていきたい。

### 一

「運命論者」は、全体の構成を見ると、主人公である高橋信造と聞き手である「自分」との出会い・信造の告白・二人の別れといった形式を持っている。勿論、信造の告白がこの作品の中心に据えられているのはいうまでもない。こうし

たスタイルは、独歩文学に馴染の深いものであるが、この作品における「自分」は、他の作品と異なり、主人公の立ち場をより鮮やかに浮き彫りにする意味を担っている。

「(略)——貴様は運命といふことを信じますか？え、運命といふこと。如何です、も」と彼は體を上げたので、「イヤ僕は最早載ますまい。」と杯を彼に返し「僕は運命論者ではありませんん」彼は手酌で飲み、酒気を吐いて、

「それでは偶然論者ですか。」

「原因結果の理法を信するばかりです。」

「けれども其原因は人間の力より発し、そして其結果が人間の頭上に落ち来るばかりでなく、人間の力以上に原因したる結果を人間が受ける場合が沢山ある。その時、貴様は運命といふ人間の力以上の者を感じませんか。」

「感じます、けれども其は自然の力です。そして自然界は原因結果の理法以外には働かないものと僕は信じて居ますから、運命といふ如き神秘らしい名目を其力に加へることは出来ません。」

ここには、二人の立ち場が明確に表明されている。信造が「怪しい運命の力に惑うて居る」△運命論者▽であるに対して、聞き手である「自分」は「運命といふ如き神秘」を容認せず、「原因結果の理法を」信する合理主義者として設定されている。従って、二人の邂逅も、「自分」にとっては単なる出会いであつても、信造にとっては「やはり怪しい運命」が引き合わせたものとして受け止めることになる。

△運命論者▽ならぬ「自分」は一度は男の許を去ろうと思つたが、自殺すら許さず、ただ自滅するしかないのだという信造の悲痛な声を聞き、秘密の告白を聞くことになる。

信造の語る悲劇が、先に触れたように「運命論者」の核を成しているが、それは大きく二つの部分から成り立っている。その一つは、実の父であると信じてい

た人が他人でまいったという出生上の秘密が記述されている部分であり、他の一つは、自分の妻が異父妹であったという、出生上の秘密がさらに増幅され決定的な悲劇を生成していく部分である。このように「運命論者」は、一つの事実・秘密から新たな悲劇が派生していくといった重層的な構造を持っている。

信造の不幸な生涯は、馬場信造・大塚信造・高橋信造という異なった三つの姓を有するところにその因がある。

高橋姓は、養家のものであるが、信造は先ず大塚信造として父剛蔵に育てられる。しかし、信造は「腕白小僧で」「骨格も父に肖て違まし」い弟秀輔とは異なり、「物陰に一人引込んで、何を考がへるともなく茫然して居ることが何より好」きな少年であった。そうした信造に父はある時、「お前は誰かに何か聞は為なかつたか。」と謎めいた詰問をしたこともあり、また隣に住んでいた老人夫婦から信造が囲碁の遊びを習ったことを父に話したところ、父は異常な形相で信造を叱責したこともある。

こうしたことから、信造は「日の経つに従がうて」自分の「身の上に一大秘密のあることを益々信ずるやうになり」、十六才の時ついに「私は真実に父様の兎なのでせうか。」と問う。

父の語ったところによると、山口の地方裁判所に父が奉職していた頃、父と非常に懇親であった碁客馬場金之助の一子が信造であったというのである。そして、馬場は病気で死に、妻もまもなく夫の後を追ってこの世を去り、残された二才の孤児信造を剛蔵が引きとり実子として届け出たというのである。

以上が、第一の事実であるが、信造はやはり「悪運」の兎であったのである。信造は二十五才の春、法律事務所勤務することになるが、訴訟用から出入りしていた高橋という雑貨商の娘里子と結婚する。しかし、この結婚生活も養母の奇妙な行動から、次第に暗い運命にもてあそばれることになる。それというの

も、養母は夜も更けてくると、きまって居間に籠って一心不乱に不動明王を拝み、果ては信造を怨霊と見間違えるようになる。信造は「自分」に「この先を詳しく話す勇氣は僕にありません。事実を露骨に手短かに話しますから、其以上は貴様の推察を願ふだけです。」といい、次のような真相の告白をしていく。

「高橋梅、則ち僕の養母は僕の真実の母、生の母であつたのです。妻の里子は父を異した僕の妹であつたのです。如何です、これが奇しい運命でなくて何とませう。斯の如きをも原因結果の理法といへばそれまでくす。けれども、かゝる理法の下に知らずく此身を置れた僕から言へば、此天地間

にかゝる惨刻なる理法すら行なはるゝを恨みます。」  
異父妹と知らず結婚した信造、しかも、母は瀕死の夫を見捨て、密夫と走った怨恨の人であつたのである。「生の母は父の仇です、最愛の妻は兄妹です」という信造は、いわば運命に呪われた悲劇の人であつたといつてよい。

### 三

ところで、この作品を現実の独歩に重ねて読もうとする受け取り方がある。その代表的なものは、前田重氏の「独歩の秘密」(「展望」昭22・5)であるが、この論文以来「運命論者」は独歩の虚構か、それとも事実と密着した独歩連れ子説を補強する作品であるかの読みが大きな比重を持っていた。こうした読みが出てくるのも、実は「運命論者」の人物設定と現実の独歩をめぐる類似点が多いことによる。ここで短絡に結論を下すことは出来ないが、少なくとも、次のような独歩の発言を出発点とすべきであると思う。

余は半面に於て運命論者なり。而して他の半面に於て又事実論者なり。吾人の日常遭遇する総ての出来事を以て、直に単純なる事実とのみに解釈し得る事能はず。事実以上、吾人の力を以て予測し難き運命の存する事を認む。

(中略) 吾人の智力の未だ到底予測し得ざる何等か神秘不可思議なる力の存するありて、吾人の一生の半はその手に操らるるには非ざる乎。余は此力を以て運命を解するなり。故に余は吾人日常の総てを通じて単に事実とのみ解し、運命の力を否定し去る能はず。然れども又総てを運命の力なりと断定して、運命の力以外全然人間の權威を認めずと言ふに非ず、所詮、吾人一生の起伏を通じて、事実と運命とは相半ばするなり。(中略) 余の「運命論者」は全然空想に依りて、作られたる人物なるも、此運命に対する余の思想を具体化したるものなり。(「病牀録」)

「運命論者」の真の理解は、こうした作者自身の発言を基として、独歩の出生上の問題、A運命観Vの形成過程、作品上に描出されたA運命Vの三側面を総合したところにかかない。ここでは紙数の余裕がないので、独歩のA運命観Vの形成過程を通しての考察に焦点を絞りたい。

### 四

今日見ることの出来る独歩の文章のうちで、最も早くA運命Vという語が見えるのは、次のようなものである。

よしや落第が真実にしる余は専門学校の哲夫に非ざるなり、余は明治二十三年七月の哲夫に非ざるなり余の運命は未来幾十年にわたれり余何ぞ落第位に落第せんや君余の知己なり、よしや落第が真実とするも余を目して余の凡ての運命に落第したる人とはせざるべし。(明23・7・23大久保湖邦宛書簡)

ここに書かれている事実は、明治二十年に入学した東京専門学校英語普通科三年の課程を終了しながらも、病のため修了試験を受けることが出来ず落第した際のものである。相当の自信と自負を持って上京した独歩の最初の蹉跎であった。しかし、青春期特有の衝気のいか程かはあるにしても、「余の運命は未来幾十年にわたれり余何ぞ落第位に落第せんや」「凡ての運命に落第したる人とはせざるべし」という文には、それ程悲愴な思いはなく、落第という事実も、独歩にとってさほど衝激的なものではなかった。この後、九月独歩は直ちに英語政治科一年に再入学する。

しかし、決意も新たに再出発を期した独歩であるが、翌二十四年三月、学校改革のためのストライキ事件を期に退学してしまい、ついに五月一日帰国することになる。帰省の際に記された「午前六時汽笛一声汽車は余が千万無量の感慨を載せて新橋を発したり」(『明治二十四年日記』5・1)という一文に托されているのは、先に示した「余の運命は未来幾十年にわたれり余何ぞ落第位に落第せんや」という一文に表象されるものとは大きく異なる。それは、おそらく、現実の中で自己の夢が敗れ挫折していった悲痛な内面であろう。こうした内面が、実は次に挙げるような思いへと独歩を導いていくのである。

此の際余の感情を痛く刺激したるは、寂寞たる小島の海浜にひとりの人間あり、定めて彼はこの山かげに見る茅屋の主人なるべし、黙々として何かあざり居たり。余が、眼裏、彼を映じたる一刹那、嗚呼かくしても一生涯は一生涯なりとの感、熱涙と共に突き起る。而も顧みて吾を思ひ、吾及び多くの人も亦密に考究し来れば、或る無形の一小島に碌々生涯を送る者なる事を感じ、人間は小なる者哉と思ひたり。(5・3)

明治二十四年五月一日新橋を立った独歩は、三日神戸港を出帆し広島島に向かつて旅立ったが、瀬戸内での右の体験は、独歩の内部に余程深い思いを刻むこととなる。それは、「甚だ感激したること」として友人の中桐確太郎に宛てた手紙<sup>註1</sup>によっても知られるし、また、この体験が「忘れぬ人々」という作品の母体を形成していることによっても明白である。

『欺かざるの記』に記述されている、「午後。薄暮青年文学社より帰り来りて

此の記を書す。吾は教師を希望す。吾に出来る丈の教師たる可し、人生の批評は吾が事業たる可し。ア、吾は人情の爲めに此の生命を投せん、見よ土を掘て一生を終る者あり、絶海の孤島に一生を終る者あり。神よ助け給へ。――ア、爾の周辺を見よ、如何に悲しき世界よ、爾の友等を見よ、如何に悲しき人間の運命ノ」(26・3・20)の「土を掘て一生を終る者」「絶海の孤島に一生を終る者」への着目も、やはり、基本的には、明治二十四年五月三日の瀬戸内体験に根ざしている。

独歩は、少年時を回想し「全体自分は、功名心が猛烈な少年で在りまして、少年の時は賢相名将とも成り、名を千歳に残すといふのが一心で、ナポレオン、豊太閤の如き大人物が自分より以前の世にあつて、後世を圧倒し我々を眼下に見て居るのが、残念でたまらなないので半夜密かに、如何にして我れは世界第一の大人と成るべきやと言ふ問題に触着つてばろく涙をこぼした事さへ有る」(「我は如何にして小説家となりし乎」明40・1)と語っているが、封建的身分制度の桎梏から解き放たれ、『西国立志編』をバイブルともし上京した独歩の心中は想像に難くない。しかし、現実には先に見たように意のままに動いていったわけではなく。都会での立身出世を断念し帰郷を余儀なくされた独歩の内面は複雑であったに相違ない。「人生の批評」者としての教師として、自己の確立を図りたいと決意した背景にある「見よ土を掘て一生を終る者あり、絶海の孤島に一生を終る者あり。」という述懐と「如何に悲しき世界よ」「如何に悲しき運命」という悲痛な詠嘆は、その辺の事情をよく表わしている。具象的に言えば、現実社会に受け入れられずに時流に押し流されていく知識人独歩の敗北・挫折の末路を「土を掘て一生を終る者」「絶海の孤島に一生を終る者」といった小民に重ね合わせているのであり、同時にここには独歩の最初の「運命観」とも言うべき、自己の才能あるいは努力をはるかに超越した「運命」の認識がある。しかし、ここで独歩精神史の上での大きな転換がなされていることを見逃すわけにはいかない。つまり、「名を千歳に残す」といった立身出世主義に根ざす生き方からの転換である。

この頃の日記には「文学を以て世に立たんことを決心」したことが盛んに記されているが、翌二十一日の次の記述は、独歩の文学者としての基本理念がうかがえるものである。

多くの歴史は虚栄の歴史なり、パニティーの記録なり。人類眞の歴史は山林海浜の小民に問へ、哲学史と文学史と政權史の外に小民史を加へよ、人類の

歴史始めて全からん。

多くの歴史は歴史家の歴史なり、(人間心霊、ヒューマンティの叫声を記録せよ)、学者の歴史なり、政治家の歴史なり、彼等頭裡の樓閣のみ。伝記は断じて歴史より貴し。

ここに見られるような「小民史」の近代文学史への提出が、独歩文学を個性ある独自のものにしたわけであるが、それは「小民」へのストレートな着目ではなく、先に触れたような独歩の屈折した内面の反映である。ただ、それが単なる独歩個人の問題を越えた普遍的な「小民」像へと収斂されていたのは、実は「爾が多感なる想像は、茲に來りし爾の同類の上を翔る、爾は山間に樵夫一個の靈を想ふ、爾は海濱に漁夫一個の靈を想ふ、爾は陋巷に餓婦一個の靈を想ふ、爾は獄裏に汚悪なる靈を想ふ。(中略)靈が想像は古より今、西より東、凡て人類存在の運命の上を走る、而して自らを此運命の裡に見出す。」(『欺かざるの記』明26・8・24)といった認識によってである。

しかし、この頃A運命Vに対する注視が、独歩にとって大きな比重を持っていたかという点必ずしもそうではない。『欺かざるの記』明治二十六年五月十二日の項には、「吾が疑問、迷惑、信仰、感情、思想を経緯する題目」として、「美」「善」「誠」「教師」「宇宙」「人情」「田舎の小民」といった独歩文学にとって馴染の深いもの他七十余の項目が列挙してあるがA運命Vという項目はない。

## 五

独歩のA運命観Vが、独歩の内部でより鮮明な輪郭を持って来るのは、「存在」そのものへの注視によってである。

人若し主観的の思想を離れて、只だ生、死の海の無際を顧み、紛々窮りなき人世を想ふ時は、実に一身の渺乎一泡沫の如きを感じ、此の時に当りて誰れか厭世家たらざる者あらんや、人間とは只だ偶然の運命に弄せられて、悲喜哀感する所の一肉塊に過ぎざらんとす。誰れか人事の空を感じざる者あらんや。而して人生の一面は確かに然るなり。是に於てか疑心起り失望生じ、或者は恨死し、或者は放情以て生をやる。而も其事何を意味する、善何の意、悪何の意、義何の意、偽何の意。

然れども是れ人性を信ぜざる者の疑惑なり、天地の美を感じ、神の愛に感ずる人性を信ぜざる者の疑なり。

吾茲に在り、ア、茲に在り。(『欺かざるの記』明26・6・9)

ここには、「運命論者」について『病牀録』で語っている独歩のA運命観Vの原型があるが、「人間とは只だ偶然の運命に弄せられて、悲喜哀感するところの一肉塊に過ぎざらんとA運命Vの存することを一応認めながらも、それを「人性を信ぜざる者」「天地の美を感じ、神の愛に感ずる人性を信ぜざる者」の「疑惑」であるとしている。しかし、このように記す独歩も、一方では「親しく神の限りなき愛を感じ信じ神に凡てをまかして地上の運命に支配せられず、希望と美と善との自由の境に逍遙することは言ふ可くして容易の事に非ず。」(『欺かざるの記』明26・9・6)とA運命Vの「不可思議変妙なる」力を強く認識せざるを得ないのである。そして、人間を支配するA運命Vの強大さの認識は、やがて、「吾茲に在り、ア、茲に在り。」といったA運命Vに支配される側の人間そのものの「存在」に関心を向けさせていく。

「存在」そのものへの注視・関心は『欺かざるの記』中を一貫して流れているものであるが、それは、例えば「余茲に立つ、余茲に生る、余茲に在り。余に取て如何なる事実も是れより大なる事実、確かなる事実は在らず。」(明26・9・8)、あるいは「『吾、今、茲に、在り』凡ては此のうちより来る」(明27・7・7)等いくらでも挙げることが出来る。この「存在の事実」への着目は、「実存の自覚」と言い換えてもよいが、当然のこと「存在の事実」の不思議へと深化していく。

吾存す。是れ吾に在りて最初の事実、最初の命運、最初の驚異なり。(『欺かざるの記』明27・5・21)

ところで「人類眞の歴史は山林海濱の小民に問へ」という「小民史」の提言が独歩の基本的文学理念であるとするならば、「シンシリティ」という概念は、独歩の作家としての基本姿勢であるという風に言うことが出来るが、この「シンシリティ」獲得の根幹に「存在」への注視があることは、特に注目すべきことである。

詩人は何故に生るるか、教へ育つ可からざる乎。われ今にして此を得たり。「シンシリティ」は教へ示す可からざればなり。「シンシリティ」の感は直覚なり。直覚は教ゆ可からず。而して詩人が第一の生命は「シンシリティ」なり。如何に詩人らしくとも、「シンシリティ」なき詩人は何事も観る能はず、何事も教ゆ能はざる也。

事実、わが存在する茲に起り、茲に在り、茲に存し、茲に現はる者は自然にせよ、人事にせよ、悉く事実なり、妄想に非ざる也。わが存在が事実なるが故に。(『欺かざるの記』明26・8・6)

「詩人が第一の生命は『シンシリティ』なり」「『シンシリティ』なき詩人は何事も観る能はず」という強い主張は、詩人が詩人たるための要諦について述べたものであるが、こう記した直ぐ後に「存在の事実」に触れていることは、「シンシリティ」と「存在の事実」との深い関わりを示すものである。

ついでに言えば、『欺かざるの記』は作家独歩としての歩みの書とみるこゝとが出来が、文学者としての主体確立の二つのエポックは、先に触れた「小民史」発見とここで触れたところの「シンシリティ」の獲得であると言える。独歩はまた、「『事実』の前に『シンシリティ』ならば爾必ず、真を失はざる可し。」(明26・8・11)とも記しているが、それは詩人としての根本要件として「存在の事実」の実感を挙げていることでもある。

この始原的実感である「存在の事実」の不思議さを核として、独歩の関心が人間の「生活」「ドラマ」へと拡充していく過程は次に挙げる部分ではっきりしてくる。

自然ノ宇宙、固とより不思議なり。人間ノ嗚呼人間に至りては更に不思議に非ざる乎。彼は自然の法則に支配せられつゝあるなり。而して不思議なるは其生活、運命、及びドラマなり。(『欺かざるの記』明26・11・17)

しかし、「存在」の不思議に基づく独歩の運命観Vが、自らの体験を通して強く認識されていったのは、信子事件を通してである。佐々城信子と独歩との経緯については、よく知られていることであり、私自身も別の場所でも触れたことがあるので、ここでは詳しくは触れない。ただ、次のような部分に注目したい。

げに不可思議なるは此の天地と此の世とに於ける人の生命と運命とにてあるなり。不思議と思ふ念のみ加はるぞかし。(『欺かざるの記』明29・8・18)

「わが恋愛は遂に勝ちたり。われは遂に信子を得たり」と独歩が日記に記したのは明治二十八年十一月十一日のことであるが、わずか半年に充たない翌二十九年四月十八日には「嗚呼信子、信子、吾が愛足らざるか。面白くもなき世なるかな。哀れなる人の運命。(中略)死とは何ぞや。生とは何ぞや。愛とは何ぞや。死を包む此の地の神よ。吾が一生の命運ノ何者か吾を導き、吾を誘ひ、吾を支配するぞ」と書かずにはいられない。「シンシリティ」こそ詩人の最も重要な条件とし、

「存在の事実」の不思議さに驚異しようとした独歩に、信子事件は「吾人の智力の未だ到底予測し得ざる何等か神秘不可思議なる力」の存在を示し、「吾人の一生の半はその手に操らるる」という運命論者Vとしての独歩を造りあげていったといつてよい。

そして独歩は、詩人、文学者としての自己を運命Vとみなし作家活動に入っていくことになる。

信子は吾を捨てて走りぬ。これも可なり。これも事実なり。人間に行はれし事実なり。われは功名をも愛し、功名を愛せざることをも愛す。

われは詩人たるべし。これ吾が運命なり。あへて天職といはず。(『欺かざるの記』明29・9・7)

## 六

独歩の運命観V生成の過程を以上のように考察した上で、「運命論者」に再びたかえることにする。

先に引いたように、独歩は「病牀録」の中で「余は半面に於て運命論者なり。而して他の半面に於て又事実論者なり」「余は吾人日常の総てを通じて単に事実とのみ解し、運命の力を否定し去る能はず。然れども又総てを運命の力なりと断定して、運命の力以外人間の權威を認めずと言ふに非ず、所詮、吾人一生の起伏を通じて、事実と運命とは相半ばする」とし、「『運命論者』は全然空想に依りて、作られたる人物なるも、此運命に対する余の思想を具体化したるものなり」と記しているが、「運命論者」の聞き手である「自分」が「事実論者」の立ち場であり、高橋信造が運命論者Vとしての立ち場にいることは、異論のないところである。

「運命論者」における「自分」は「あくまで単なる説話者として、作品の主人公を紹介する役をつとめているだけ」でも、あるいは「作者が『自分』に出会った人間だとして、きわめてリアリティックに描いてみせることだ」「その人間の身の上話の真实性を」「保証している」<sup>注</sup>だけでもない。聞き手である「自分」は、小説手法上の形式的な役割りを持つだけではなく、人事論者Vとしての作者独歩の一面が付加されているのである。

従つて「自分」は、信造の告白を「一言も交へないで」聞き「聞き終つて暫くは一言も発し得ない」のである。ただ、その告白を聞き「断然離婚なさたら如何です」と解決策を述べるが、信造の「それは新しき事実を作るばかりです。既

に在る事實は其爲めに消えませんが」という言葉に対して何も答えることが出来ないものである。

自分は握手して、黙礼して、此不幸なる青年紳士と別れた、日は既に落ちて余光華かに夕の雲を染め、願れば我運命論者は淋しき砂山の頂に立つて沖を遙に眺て居た。

其後自分は此男に遇ないのである。

この「運命論者」の終末は、「吾人の力を以て予測し難き運命の存する事を認め」独歩と「総てを運命の力なりと断定して、運命の力以外全然人間の権威を認めずと言ふに非ず」という独歩の二面性が象徴的に描かれていってよい。力点は「運命論者V」としての信造にあるとしても、「自分」も高橋信造も、各々の自説を開陳してみただけで、「運命論者」そのものの結着が成されたわけではない。「運命論者」のストーリーの異常性に幻惑されて、聞き手である「自分」に托された深い意味を見失ってはならない。

それでは、信造の語る「運命V」とはいかなるものであつたか。信造は、「自分」との出会いの際の様に言っている。

『(略) それでは貴様は宇宙に神秘なしと言ふお考なのです、要之、貴様には此宇宙に寄する此人生の意義が、極く平易明瞭なので、貴様の頭は二々が四で、一切が間に合うのです。貴様の宇宙は立体でなく平面です。無窮無限といふ事實も貴様には何等、感興と畏懼と沈思とを喚び起す当面の大いなる事實ではなく、数の連続を以てインフィニティー(無限)を式で示さうとする数学者のお仲間です。』

信造のこの発言は、要約して述べると「宇宙の神秘」「感興と畏懼と沈思とを喚び起す」「宇宙に寄する」「人生の意義」について語ったものである。また、こうした「宇宙の神秘」「感興と畏懼と沈思とを喚び起す」「人生」を体現したのが故に「運命論者V」としての信造が形成されていったのである。信造の「運命論者V」としての発言内容は、先に考察した独歩の「運命観V」とほとんど重なる。「存在の事実」を核として「自然ノ宇宙、固とより不思議なり」「げに不可思議なるは此の天地と此の世とに於ける人の生命と運命とにてあるなり」と記した独歩の「運命論者V」としての半面が信造を造型しているのである。このことは、『欺かざるの記』時代に生成された「運命観V」の延長線上に「運命論者」があることを示している。

また、高橋信造は、「牛肉と馬鈴薯」(明34・11)「岡本の手帳」(明39・6)

の岡本誠夫と各々の体験こそ異なるが思念の根はほとんど同じであると言っている。ただ「牛肉と馬鈴薯」における岡本は、「不思議なる宇宙を驚きたい」「驚異の念をもってこの宇宙に俯仰介立したい」と自己の願いを声高に述べると同時に、その困難さを誰よりも知っており「言ふべからざる苦痛の色」を浮かべる現実主義者でもあるが、しいて言えば、「言ふべからざる苦痛の色」を浮かべる岡本は、「運命論者」における「自分」と相似であると言えなくもない。

信造の語る悲劇は、おそらく、独歩戸籍面の錯綜から着想されたものであろうが、それはあくまで、独歩の「運命観V」を最も印象的かつ効果的に描出するための骨組みを形成しているに過ぎない。「運命論者」の世界があまりに特異であるため、とかく独歩の出生の秘密に結びつけて考えられがちであるが、独歩の「運命観V」の生成過程を辿り、また独歩文学全体の中にこの作品を置いてみると、やはり力点は独歩の「運命V」に対する思想告白にあると言える。従って「運命論者」の評価軸も、神秘主義者としての側面と合理主義者としての側面を同時に共有した独歩の内部構造に置く方がよほど有効に思える。

注1 明治二十六年九月十三日「小生嘗て中国の内海、水島灘を航す。甲板の上を蹊想して往來す、忽ち孤島の中一個の人影を認め、甚だ感激したることあり。」

注2 瀬沼茂樹「国木田独歩『運命論者』」(岩波講座「文学の創造と鑑賞」(昭29・11))

「付記」1 独歩の文章の引用は全て学習研究社版「国木田独歩全集」によつた。なお、引用に当たって、旧字体の漢字は新字体に直し、圈点傍線の類はすべて省略した。

2 小考はその大要を昭和五十四年度広島大学国語国文学会春季研究集会上において発表したものである。